

ほんばこ



No. **66**

日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第 66 号 (通巻第 82 号)

2022 年 3 月 18 日発行

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

日本教育会館 5 F

教育図書館

Tel/Fax : 03 (3230) 4437

Mail : toshokan32304437@jec.or.jp

<http://www.jec.or.jp/tosho/>

● 目 次 ●

・ 沖縄復帰 50 年に寄せて

渡久山 長輝 2 ~ 3 p

《 図 書 紹 介 》

教育図書館 4 ~ 5 p

・ 『哲学で抵抗する』

高桑和巳著 集英社

・ 『海をあげる』

上間陽子著 筑摩書房

・ 最近の受入図書 (2021年12月~2022年2月受入)

6 ~ 7 p

・ 教育図書館のご案内

8 p

沖縄復帰50年に寄せて

渡久山 長輝

今年は、沖縄の日本復帰50年である。

1945（昭和20）年4月1日に米軍上陸。6月末までに沖縄戦は終結。沖縄返還協定が1971年（昭和46）年6月17日に調印される。1972年（昭和47）年5月15日に発効され、沖縄の施政権がアメリカから日本に返還された。

復帰当時の沖縄の教育課題として、学制については、米国の制度にあわせ、本土は1947年に六・三・三・四制が実施、沖縄本島は1948年4月、八重山群島は1949年4月に実施されたことから問題はなかった。だが、教育委員会制度は、沖縄では、戦後27年間公選制であったので、復帰にともなって本土並みに変えられた。また、教育税があった。

軍政府、民政府、群島政府、琉球政府時代それぞれの戦後の沖縄の教育については、『沖縄の戦後教育史』（1977年3月発行、沖縄県教育委員会編集）が詳しい。

復帰後の大きな課題は、教員の免許、資格のことで、現職の教員に対して、本土の主な大学の先生方、文部省職員らによって精力的に講習会が開かれた。また、校舎の建設が急ピッチでなされた。その他、沖縄の教育関係の法令は廃止された。そのなかに「琉球教育基本法」があった。条文は本土の基本法と同じであったが、「日本国民として」の文言があったのが印象的である。

日本教育会館5階の教育図書館には沖縄に関する本が多くあり、『沖縄戦－沖縄を学ぶ100冊』（1985年、沖縄戦－沖縄を学ぶ100冊刊行委員会）にも取り上げられたものだけでなく、いくつか紹介する。

『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』

（仲宗根政善編著 角川書店 1980年）

この本は、著者が、ひめゆり学徒を教員として引率し、戦場での貴重な体験の手記をまとめたもので、生々しい記録である。著者は「まえがき」でこうしている。

「20余万の生霊の血をもって山河を染め、沖縄は「血の島」となった。とくに悲惨をきわめたのは、ひめゆり学徒隊の最期であった。わずか16歳から20歳までのうら若い乙女らが、激しかった戦争に参加してかくも多数の戦死した例は、人類の歴史にかつてなかった。（中略）

乙女らはもとより戦を好んで戦死したのではなかった。いたずける勇士をいたわり女性のもつ優しい天性のゆえにたおれたのであった。乙女らは沖縄最南端の喜屋武の断崖に追いつめられて、死の孤独感におそわれ、岩肌にピンで自分の最期を記していた。（中略）

乙女らが書き残そうとした厳粛な事実を私は誤りなく伝えなければならない義務を負わされている。（中略）

この記録は文学でもなく、生き残った生徒の手記を集めて編纂した実録であり、氏名も日時も場所も正確を期した。……」

『鉄血勤皇隊』

（大田昌秀著 ひるぎ社 1977年）

沖縄戦で「鉄血勤皇隊」として闘った沖縄師範学徒の手記と戦場での任務について描かれている。目の前で戦死する学友、かろうじて生き残れた学友など、著者自ら学徒としての貴重で生々しい体験の記録である。



『鉄の暴風』

(沖縄タイムス社編第9版 1980年)

沖縄戦全般について、住民側から太平洋戦争の記録として初版は1950年8月15日発行された。1980年の重版に際して以下のように書かれている。



「初版は米軍統治下という悪条件の刊行でしたが、執筆にあたっては、米軍の意図、あるいは受け取り方がどうあろうと、これに呼応することは一切控えたつもりです。」

『沖縄の悲哭』

(牧港篤三、儀間比呂志、集英社 1982年)

沖縄戦のあらゆる場面を沖縄の版画家儀間比呂志と牧港篤三の詩で描かれた異色本。

『戦がやってきた』(1979年、儀間比呂志、中山良彦文 集英社)につづく沖縄戦版画集。

「戦争とは、なんと出口のない深い森のようなものであろう。」と牧港篤三氏は序文でいう。

「水汲み」王城内の井戸(カー)より

帰る時のために しっかりと地理を 頭のなかに
刻み込んでおくこと

ゆるされた 時間と 空気を 一気に走り抜けよ
虚空に 手を伸ばし 壕を引き寄せたい

緊張した 時間が 裂けそうに 大気を孕んで
大事な 大事な バケツの水をゆさぶる

城壁が 醜い腸(はらわた)を見せて 生き物の
ように うごめいている

後ろを ふり向くな 走れ ただ走れ

空気を裂いて 無慈悲な奴が 飛び込んでくる
井戸の底で 返らぬ つるべを 何度も返そうと
する (……以降、略) 牧港篤三：詩



7血の池『沖縄の悲哭』儀間比呂志：版画

『静かに過ぎ去る時とともに』

(中谷行雄著 労働教育センター、1995年)

摩文仁公園の塔や各県の慰霊碑の写真と碑文の記録。沖縄戦を問う問題提起の本。

「この写真集に収められた塔や碑は、沖縄県を除く全国の都道府県のもものが46基、各種団体のもものが15基、学校関係が17基、沖縄県市町村のもものが87基、軍関係が52基、合計218基である。(中略)本写真集のもう一つの特色は、碑文のあるものについては、可能な限りそれを記録として活字にしたことである。」(発刊によせて 東江康治：元琉球大学学長)

その他『ぶっそうげの花ゆれて』(沖縄県退職教職員の会婦人部編 ドメス出版1984年)などがあり、沖縄戦での教員の体験記がつづられている。

復帰前後の関連法令は、『沖縄問題基本資料』(南方同胞援護会編 1968年)が詳しい。『沖縄県史』も琉球政府編のものがある。教育図書館には教育関係のさまざまな資料があるが、私が館長の時に関心があったのは、各県教組、高教組の「運動史」や刊行物の収集である。今後も各教職員組合の協力を特にお願いしたい。

(元日本教育会館館長、沖縄県石垣市出身)

・主な著書

『沖縄と日本本土』(労働教育センター 2000)

『日教組の散歩道』(郁朋社 2009)など

《 図 書 紹 介 》

『哲学で抵抗する』



高桑和巳著 集英社 2022年1月

筆者は、抵抗とは、やむにやまれぬ振る舞いであり、「大きなものに流されそうなときに、断固踏みとどまること」という。それは運動の形をとることもあれば、不動の形を取ることもあり、総じていえば、「言うことを聞かないこと」と言ってもいい。既得権益に乏しい者が、支配的な権力に対し、「もう、これ以上おまえたちの好きにはさせられない」というのが抵抗であるが、その権力とは、政治的権力だけを指すのではなく、停滞、よどみ、惰性、無思考、泣き寝入り、忘却といったものを強いてくる、あるいは、「まあ、これでいいか」と妥協を促してくる、すべての優位な力のことをすべてさす。

公民権運動の主導的地位に就いたキングは、1963年4月12日、アラバマ州バーミングハムに乗り込み、運動を組織した際、逮捕、収監された。筆者は、キングが獄中で書いた手紙から、キングの抵抗が「哲学」の形をとり、人々の闘争に形をつくることができたと述べる。

収監されたキングは、13日、地元の穏健派の白人聖職者たちによる共同声明を獄中で読んだ。声明の概要は、つぎのようなものであった。「人種差別は是正されるべきだが、その是正は法廷で行われるべきであり、よそ者が指揮するような黒人のデモのような性急かつ過激な運動は認められな

い。法・秩序・常識に照らして、黒人コミュニティはこの運動から手をひくべきである。」

これに対してキングが書いた長い反論は「バーミングハム刑務所からの手紙」として知られている。

「白人穏健派は、正義より『秩序』に身を捧げ、正義の現前という積極的な平和より緊張の不在という消極的な平和のほうを好み、（中略）黒人に対して『もっと都合のいい時節』まで待つてはどうかと助言する。」

「人間の進歩は、神とともに働く者たろうとする人の倦まぬ努力を通じて到来するのであり、この大変な働きがなくなると、時間自体は社会を停滞する力に予するものになる。私たちは、正しいことをおこなうためには時間は常に熟している、ということを知っています。」

聖職者であるキングは、イエスの死後に回心し、伝道に後半生を捧げた人物パウロが「エペソ人への手紙」で、「莫迦ではなく賢者として、時間を救済して、自分が歩くところに慎重に目配りしなさい」と終末論を前提とした時間論をもとに、人間たちが「時間を創造的に用い」て自力でこちら側に引き寄せなければならない時間としたのである。キングのたたかいは、パウロが終末論を提唱した概念を云々することで、公民権運動を、曖昧模糊とした将来の彼方にかすんで見えるようなものから具体的にはっきりイメージするものへと作り変えたのである。つまり、「時間はない、いましかない、いまがその時間だ」という自分たちの切迫した時間の構想に力を与えようとしたのだ。それは、筆者が言う、「哲学は世界の認識を更新する知的な抵抗」であった。

これ以外にも、アイヌ文学を研究し続け、やがてはアイヌ民族の尊厳と自立を求めた社会運動家であり、参議院議員にもなった萱野茂のエッセイから、哲学が抵抗であることを論じている。読みごたえがある一冊だ。

(教育図書館 藤川)

『海をあげる』



上間陽子著 筑摩書房 2020年10月

著者は、琉球大学教育学研究科教授。普天間の近くに住み、沖縄で未成年の少女たちの支援・調査に携わる。この本は、沖縄での暮らしのひとつひとつを書かれた12篇で編まれている。介護、保育、水の問題、沖縄戦、若い母親の問題、性教育に関わる話など、沖縄での「目の前の日々」の積み重ねである。

単行本のための書き下ろし原稿「美味しいごはん」は、「私の娘はとにかくごはんをよく食べる。」ことから始まり、著者自身の体験が書かれている。「私には食べ物をうまく食べられなかった時期がある。」その時、近所に住んでいる友達に話すと、「あのな、陽子、自殺したらあかんよ。」「あんたの周りのひと、みんなが傷つくよ。」泣いて真剣に心配してくれる友達。本人は死ぬつもりなどなくて、言っていることがわからない。その時友達がつくってくれた粕汁を持ち帰り、とりあえず、全部食べようと心に決めた。

「生きてることが面倒くさい日々が私にあったことは、若い女の子の調査をしていると、どこかで役に立っている。」と著者はいう。

散歩に行っては野の花を摘んで庭先に植えていた祖父母の話「ふたりの花泥棒」では、祖父が亡くなって、墓に納骨したあと、みんなで海に入る今帰仁村の風習が書かれている。

著者は、沖縄戦で生き残ったおばあから話を聞く。そのおばあから娘にお小遣いをもらい、「何

かの記憶として残しておかないといけない」と、娘にアイスを買ってあげる。

著者が東京で暮らしていた時、沖縄出身だと話すと、沖縄大好きですなどと仲良くしてくれる人は多かったが、軍隊と隣り合わせで暮らす沖縄の日々の苛立ちを伝えるのは難しいと思い、黙り込むようになる。さらに、沖縄での抗議集會に、「怒りのパワーを感じにその会場にいたかった」と言われ、びっくりして黙り込む。

「沖縄に基地を押しつけているのは誰なのか。三人の米兵に強姦された女の子に詫びなくてはならない加害者のひとは誰なのか。」言わなかったから、その言葉は著者のなかに沈み、今も自分の中に残っている。

仕事を得て、沖縄に帰ることになった著者は、暮らしの場を普天間基地に隣接している地域にしないでほしいと思った。「沖縄の基地問題に関心を示しながら基地を押し付けたことを問わずに過ごすひとたちのなかで暮らしてきて、かたくなに沖縄の厳しい状況のなかに身を置いて生活しないといけないと考えていたのだと思う。」厳しい状況を共有することの難しさ。助けたいと思いながら、どうしたらよいのか、生きている間、何度か問いかける場面がある。著者はそんな現実のなかできちんと向き合うことを選択している。

「それでも沖縄で暮らすようになってからは、沖縄で基地と暮らすひとびとの語らなさのほうが目についた。」

「沖縄のひとたちが何度やめてと頼んでも、青い海に今日も土砂が入れられる。」「土砂が投入される前の、生き生きと生き物が宿るこっくりとした、あの青い海のことを考える。」

「この海をひとりで抱えることはもうできない。だからあなたにあげる。」と著者はいう。

著者ひとりではもう抱えることはできない。この海を受けとめてもらいたいと思い、この本を紹介します。

(教育図書館 川内)

最近の受入図書

(2021年12月～2022年2月受入)

【日教組刊行物】

『Q & A 新教職員の勤務時間』日本教職員組合
編著 (株)アドバンテージサーバー 2021.11

『第12回 TOMO-KEN 青年教育実践交流
集会 2021』報告集 日本教職員組合編
2021.10

【教育総研・県教組刊行物】

『「経済産業と教育」研究委員会 報告書』教育
文化総合研究所 2021.6

『神奈川県立高校における「日の丸・君が代」強
制の歴史』神奈川県高等学校教職員組合編
2021.11

【防災・減災】

『近年の自然災害と学校防災』兵庫教育大学連合
大学院 防災教育研究プロジェクトチーム著
2021.3

『コロナ禍に発生した災害対応 令和2年7月豪
雨 熊本県はいかに動いたか』編集 熊本県
ぎょうせい 2021.12

『自然災害：そのメカニズムに学ぶ』太田猛彦著
学研プラス 2021.1

『地図から読み解く自然と防災(減災)』酒井多
加志著 近代消防社 2019.6

教育図書館について

教育図書館は、1966年10月1日、財団法人日
本教育会館の附設図書館として設立されまし
た。教育関係図書を中心に、日本教職員組合結
成以来の刊行物、全国教研集会報告書などのほ
か、教育文化総合研究所(略称教育総研、前身
は国民教育研究所)の研究成果、教育学一般、
教育実践記録などを重点的に収集、閲覧に供し
ています。

【平和教育】

『暁の宇品』堀川恵子著 講談社 2021.7

シリーズ戦争と社会1『戦争という問い』蘭信三
ほか編集委員 岩波書店 2021.12

シリーズ戦争と社会2『社会の中の軍隊』蘭信三
ほか編集委員 岩波書店 2022.1

『少女たちの戦争』中央公論新社編 中央公論新
社 2021.11

【和雑誌】

『月刊高校教育』

VOL.52 No.1—No.6 (2019.1～2019.6)

VOL.52 No.8—No.13 (2019.7～2019.12)

VOL.53 No.1—No.6 (2020.1～2020.6)

VOL.53 No.7—No.13 (2020.7～2020.12)

『初等教育資料』

No.995—No.1001 (2020.7～2020.12)

No.976—No.981 (2019.1～2019.6)

No.982—No.987 (2019.7～2019.12)

『中等教育資料』

No.992—No.997 (2019.1～2019.6)

No.998—No.1006 (2019.7～2020.3)

No.1007—No.1012 (2020.4～2020.9)

【文部科学省関係・法令】

『文部科学法令要覧』令和4年版 文部科学法令
研究会監修 ぎょうせい 2022.1

【教育・経済・社会・歴史】

『画一化する授業からの自律』子安潤著 学文社
2021.9

『職員室をつくる承認の科学』片山紀子著 ジダ
イ社 2021.1

『教育にこだわるということ』ガート・ビースタ
著 東京大学出版会 2021.11

『解きたくなる数学』佐藤雅彦ほか著 岩波書店
2021.9

『賃金破壊』竹信三恵子著 旬報社 2021.11

『複雑化の教育論』内田樹著 東洋館出版社
2022.1

『まんがで知るデジタルの学び』前田康裕著 さくら社 2022.1

『神奈川大学90年のあゆみ』神奈川大学百年史編集委員会専門委員会編集 神奈川大学 2019.1

『令和時代の子育て戦略』下園壮太著 講談社 2019.8

『やはり、ブラックなんですか？ 先生の仕事を100選びました』村山茂著 ごま書房新社 2021.11

『ケア宣言：相互依存の政治へ』ケア コレクティヴ著 大月書店 2021.7

『老人支配国家日本の危機』エマニュエル トッド著 文藝春秋 2021.11

『無料（タダ）より安いものもある』ダン アリエリー ジェフクライスラー著 早川書房 2021.11

『激動日本左翼史』池上彰著 講談社 2021.12

『自衛隊メンタル教官が教える心をリセットする技術』下園壮太著 青春出版社 2021.2

『多様な学びを創る』多様な学び保障法を実現する会 東京シューレ 2021.9

『学校福祉入門』鈴木庸裕著 学事出版 2021.9

『人は皮膚から癒される』山口創著 草思社 2022.2

『サラ金の歴史』小島庸平著 中央公論新社 2021.2

『語られぬ他者の声を聴く』市川薫著 開文社出版 2021.3

『水中の哲学者たち』永井玲衣著 晶文社 2021.9

『「利他」とは何か』伊藤亜紗・中島岳志・若松英輔・國分功一郎・磯崎憲一郎著 集英社 2021.3

『格差という虚構』小坂井敏晶著 筑摩書房 2021.11

『荘園』伊藤俊一著 中央公論新社 2021.9

【家庭・芸術・趣味・文学一般 ほか】

『老いも病も受け入れよう』瀬戸内寂聴著 新潮社 2022.1

『寂聴九十七歳の遺言』瀬戸内寂聴著 朝日新聞出版 2019.11

『ブラックボックス』砂川文次著 講談社 2022.1

『黒牢城』米澤穂信著 KADOKAWA 2021.6

『塞王の楯』今村翔吾著 集英社 2021.1

『同志少女よ、敵を撃て』逢坂冬馬著 早川書房 2021.11

『スモールワールズ』一穂ミチ著 講談社 2021.4

『六人の嘘つきな大学生』浅倉秋成著 KADOKAWA 2021.3

『海をあげる』上間陽子著 筑摩書房 2020.1

『赤と青とエスキース』青山美智子著 PHP研究所 2021.11

『ひとりでカラカサさしてゆく』江国香織著 新潮社 2021.12

『正欲』朝井リョウ著 新潮社 2021.3

『そのマンション、終の棲家でいいですか？』原田ひ香著 新潮社 2022.2

編集後記

今年の冬は例年と比べると寒さが厳しかった。日本海側は大雪に見舞われ、日常生活にも影響を与えた。その上、3年目に入るコロナ感染症の拡大もあり日常生活の上で我慢を強いられている人も多くいる。そんな時に、心の栄養となるのが読書である。それまで気づけなかった自分の新たな一面を浮かび上がらせてくれることもある。こんな時だからこそ、読書の旅を大切にしたい。

(藤川)

教育図書館案内

- * 開館日：(火)・(水)・(木)
- * 開館時間：午前10時～午後4時30分
閲覧はメール予約をお願いします。
✉ toshokan32304437@jec.or.jp
- * 蔵書の貸出・返却
貸出：利用者登録が必要です。
(5冊／3週間)
返却：窓口またはブック・ポスト
- * レファレンス・サービス
当館所蔵の図書・雑誌、その他教育に関する
お問い合わせはメールにてお願いいたします。
- * コピー：白黒1枚10円／カラー30円

特別コーナー

- 平和資料コーナー：
反核(原発関連を含む)・平和運動、平和
教育教材、平和教育実践記録、戦争体験記
など
- 日教組刊行物コーナー：
日教組教育新聞・教育評論・月刊JTUなど
- 教育総研刊行物コーナー：
年報、理論講座、ブックレット、季刊「教
育と文化」、各研究委員会報告書など
- 日教組教研全国集会報告書・県教研のまとめ
- 都道府県・高教組史誌、同機関誌
- 文部科学省統計調査報告書・刊行物：
学校基本調査、国際比較、教育費、学習指導
要領、指導書など
- 海老原治善文庫：元東京学芸大学教授、教育
総研初代所長海老原治善氏からの寄贈書
- 鈴木喜代春文庫：児童文学者、元教育相談室
相談員鈴木喜代春氏の著作本、寄贈書
- 人権・防災・減災コーナー：
人権関係、東日本大震災など災害の記録等

蔵書の特徴

- 教育関係図書を中心に和書、和雑誌・新
聞・洋書、洋雑誌などを収蔵しています。
- 蔵書数 約69,000冊
- 教育図書館のホームページの蔵書検索の画面
から検索できます。
(<https://ilisod001.apsel.jp/kyoikutoshokan.lib/wopc/pc/pages/TopPage.jsp>)

交通案内

- 神保町駅 A1出口より徒歩3分
- 九段下駅 6番出口より徒歩7分
- 竹橋駅 1b出口より徒歩5分
- 水道橋駅西口 徒歩12分(JR総武線)

アクセス抜群

神保町駅から徒歩3分

802名収容の大ホール



10～300名
まで使える
会議室(18室)

1階画廊
もご利用できます

一般財団法人日本教育会館
TEL 03-3230-2831
<https://www.jec.or.jp/>
受付時間 9:00～17:00